

第79回国民スポーツ大会冬季大会スキー競技会 女子種目として21年ぶりの快挙 クロスカントリー成年女子A 柏原明華選手 堂々の4位入賞!



第79回スキー競技会(あきた鹿角国スポ2025)は、令和7年2月13日から16日まで、花輪スキー場で開催されました。2月15日(土)クロスカントリー成年女子A 柏原明華選手が、国スポ冬季大会女子種目では最高の4位入賞(第59回大会以来21年ぶり)、本県国スポクロスカントリー種目では、4大会ぶりとなる入賞を果たしました。

この輝かしい成績は、広島県出身選手としては初、今大会も北海道・東北・北陸甲信越勢がひしめく中、参加成年女子A42名中、西日本出場県としてただ1人の入賞でした。

今年の国スポは、この入賞で幸先良いスタートとなりました。

このほか、ジャイアントスラロームでは、成年女子Bの佐渡仁美選手が、0.07秒差で入賞を逃す壮絶なレースもありました。次回への期待は膨らんでいます。





令和6年度

叙勲・褒章・文部科学大臣表彰受章祝賀式

公益財団法人広島県スポーツ協会スポーツ賞表彰式



令和6年12月7日(土)に、リーガロイヤルホテル広島において、今年度の祝賀式及び表彰式を行いました。

叙勲・褒章・文部科学大臣表彰受章者

叙勲・褒章

旭日小綬章(放送事業功労)

三山 秀 昭
(公財)広島県スポーツ協会特別会員
広島テレビ放送(株)元社長

旭日小綬章(金融業功労、中小企業振興功労)

山本 明 弘
(公財)広島県スポーツ協会特別会員
広島市信用組合理事長
全国中小企業団体中央会副会長

旭日双光章(金融業功労)

武田 龍 雄 (公財)広島県スポーツ協会特別会員
広島信用金庫元理事長

旭日単光章(スポーツ振興功労)

松尾 厚 弘 元(一財)広島県剣道連盟副会長

旭日双光章(スポーツ振興功労)

大中 恒 男
広島県スケート連盟・
広島県アイスホッケー連盟会長

旭日双光章(地方自治功労)

中原 裕 侑
熊野町体育協会会長

旭日双光章(地方教育行政功労)

大野 徹
(公財)広島県スポーツ協会顧問



旭日双光章(犯罪被害者支援功労)

山本 一 隆 (公財)広島県スポーツ協会評議員選定委員会委員長
藍綬褒章(産業振興功績)

松藤 研 介 (公財)広島県スポーツ協会特別会員
広島ガス(株)代表取締役会長
前広島県バドミントン協会会長

文部科学大臣表彰

(生涯スポーツ功労)

眞藤 邦 彦 (公財)広島県スポーツ協会参与、前(公財)広島県スポーツ協会理事
中川 ゆかり (一財)広島県水泳連盟理事、(公財)広島県スポーツ協会企画委員会委員
荻野 和 男 広島県ボウリング連盟副会長
西田 佳 宏 東広島市スポーツ協会常務理事、東広島市卓球協会会長
三吉 孝 広島県エスキーテニス連盟副会長

(スポーツ推進委員功労)

坂田 澄 江 広島市スポーツ推進委員協議会参与、元(公財)広島市スポーツ協会評議員

令和6年度公益財団法人広島県スポーツ協会スポーツ賞受賞者

功労者の部

松村繁(水泳)、小林竜司(柔道)、松田隆文、山口徹(レスリング)、川崎一弘(フェンシング)、筒井保俊(ホッケー)、上田宏志、佐伯幸男(軟式野球)、原昌三(バスケットボール)、加茂道郎、小川繁彦(ソフトテニス)、俵倫子、三浦純一(体操)、高垣力也(ローイング)、熊野晴文、小林寿美子(スキー)、後藤美智恵(なぎなた)、宇野本翼(エスキーテニス)、奥田耕司、後長茂代、内海義人、沖照夫(広島市)、野高義明、中島正荘(呉市)、猿田雅弘(大竹市)、西本哲也(東広島市)、富田次郎(熊野町)、仁井本敏昭、山下智子(県スポーツ少年団)、河野一彦(県高体連)



功労者 松村 繁(水泳)



国際大会優秀 石本美来(ボウリング)

国際大会優秀の部

ソフトテニス

上松俊貴(NTT西日本)
広岡 宙(NTT西日本)
内田理久(NTT西日本)
高橋乃綾(北広島町豊平地域づくりセンター)

バドミントン

前川愛生(広島翔洋高等学校)
近藤七帆(広島ガス(株))
山藤千彩(広島ガス(株))

スキー(スノーボード)

志波寿奈(広島ガス(株))
竹内智香(広島ガス)

ボウリング

石本美来(JFEスチール(株))

トライアスロン

内田煌乃亮(広島市立沼田高等学校)

パワーリフティング

國芳雅也(Kenny Project)
後藤優誠(広島電鉄(株))

全国大会団体優勝の部

水泳

広島県選抜
119区分 男子4×50m フリーリレー
119区分 女子4×50m フリーリレー
119区分 女子4×50m メドレーリレー
119区分 混合4×50m フリーリレー
119区分 混合4×50m メドレーリレー
200区分 女子4×50m メドレーリレー
280区分 女子4×50m メドレーリレー

柔道

広島大学柔道部

サッカー

呉工業高等専門学校

ホッケー

コカ・コーラレッドスパークス

ソフトボール

三川ジュニア

バレーボール

JFE西日本

ソフトテニス

NTT西日本ソフトテニス部

卓球

どんぐり北広島

アーチェリー

中国電力 ライシス

ボウリング

(株)エディオン

ベタンク

広島A(ハイシニア)

広島A(男女混合4人チーム戦)

広島県A



全国大会団体優勝 (株)エディオン

全国大会個人優勝の部

陸上	福部真子(日本建設工業株) 安立雄斗(福岡大学大学院) テレシア ムツソーニ(㈱大創産業) 三好美羽(福山市立神辺西中学校) 進藤和奏(竹尋アスリートクラブ) 中島壮一郎(広島市立舟入高等学校)	卓球	藤田勝巳 巻幡淑美 田原香葉 佐藤亜美
水泳	坂本瑞樹 福田瞳 大木あい 星山美和 池田亜希子 前峠浩義 前峠和江 下家佐江子 松本純江 尾形真知子 古戎侖人(盈進中学校)	自転車	田村一暉(京都産業大学) 新井敬太(日本大学) 桑原悠(広島城北高等学校) 奥田煌山(広島城北高等学校) 白井愛美(広島市立広島工業高等学校) 森川清司(広島県警察)
ソフトテニス	上松俊貴(NTT西日本) 長江光一(NTT西日本) 広岡宙(NTTビジネスソリューションズ㈱) 岩永淳(NTT西日本) 高橋乃綾(北広島町豊平地域づくりセンター) 岩倉彩佳(一般財団法人 どんぐり財団) 前川愛生(広島翔洋高等学校) 塚本七海(広島翔洋高等学校)	ライフル射撃 セーリング	豊澄成光(広島なぎさ高等学校) 豊澄隆成(広島なぎさ中学校)
		アーチェリー	渡邊大輔(人・夢・技術グループ㈱) 青島鉄也(㈱エディオン)
		銃剣道 ボウリング	宇恵心春(庄原市立小奴可小学校) 井戸寛(日本郵便㈱広島中央郵便局) 石本美来(JFEスチール㈱)
		トライアスロン パワーリフティング ダンススポーツ	内田煌乃亮(広島市立沼田高等学校) 亀谷充男(㈱エイテック) 西原和也(デザインスタジオBHM) 林清美(五日市記念病院)

新記録の部

陸上	福部真子(日本建設工業株) 三好美羽(福山市立神辺西中学校)
アーチェリー パワーリフティング	平本陽菜(広島県立佐伯高等学校) 後藤優誠(広島電鉄㈱)

第78回国民スポーツ大会優勝及び入賞の部

入賞者一覧は、前号(151号)に掲載

第78回国民スポーツ大会入賞競技団体の部

- 第1位 公益財団法人広島県サッカー協会
- 第1位 広島県ゴルフ協会
- 第2位 広島県銃剣道連盟
- 第6位 広島県ソフトテニス連盟
- 第8位 一般社団法人広島県ホッケー協会

令和6年度優秀指導者

- | | |
|-------|-----------------------------------|
| 松谷清志 | (陸上競技男子監督 広島県立広島皆実高等学校) |
| 岩田純児 | (サッカー競技成年女子監督 (一社)F.Ct) |
| 遠藤真仁 | (サッカー競技少年男子監督 ㈱サンフレッチェ広島) |
| 錦織えみ | (ホッケー競技成年女子監督 コカ・コーラレドスパークスホッケー部) |
| 渡部剛史 | (ソフトテニス競技少年女子監督 広島翔洋高等学校) |
| 君田 弦 | (カヌー競技成年女子監督 ㈱補聴器センターキミタ) |
| 村田興嗣 | (銃剣道競技少年男子監督 ひろしんビジネスサービス㈱) |
| 難波江美佐 | (ボウリング競技成年女子監督 深川医療器㈱) |
| 里 太介 | (ゴルフ競技成年男子監督 広陵高等学校) |



全国大会個人優勝 豊澄隆成(セーリング)



新記録 三好美羽(陸上)



国スポ優勝及び入賞 銃剣道少年男子



国スポ入賞競技団体 サッカー



優秀指導者 岩田純児(サッカー)



受賞者代表で謝辞を述べる河田悠希
(アーチェリー)

令和6年度日本スポーツ少年団顕彰(伝達)

- 登録者 飯 富 真 治 (広島市)
 加 藤 尚 (三次市)
 河 野 通 俊 (安芸高田市)
 仁 井 本 敏 昭 (熊野町)



令和6年度広島県スポーツ少年団顕彰

- (1) 単位スポーツ少年団
 道上スポーツ少年団
 海田南空手道スポーツ少年団
- (2) 登録者
 沖 本 統 康 (呉市)
 内 田 明 彦 (〃)
 児 玉 祐 宏 (福山市)
 脇 本 宏 幸 (熊野町)

「スーパージュニア選手育成プログラム2024」第4回体験プログラム

11月16日(土)の第4回体験プログラムは、午前にはボウリング、午後からはバレーボールを実施しました。午前中のボウリングは、広島県ボウリング連盟のご協力のもと、広島市中区にある広電ボウルで開催しました。まず最初にボウリングの基本的なルールを教えてくださいました。日ごろ家族や友達とゲームを楽しむ時とは違って、今回はスポーツとしてのボウリングを体験するため、ルールもしっかり意識しなくてはなりません。



続いて、投球フォームの練習です。はじめはボールを持たずに正しいフォームを身に付けます。ボウリングは、リズムが大切。「タン・タ・タ・ターン」というリズムに合わせてやっていきます。手と足のそれぞれのフォームを教わった後、手足同時に練習します。ボールを持っていないでも、最初はなかなか手足を同時に上手く動かさずでしたが、講師の方の「タン・タ・タ・ターン」の声に合わせて何度も練習をすると、だんだんとフォームがさまになってきます。しっかりとフォームの練習をしたところで、いよいよ自分に合ったボールを持って、練習投球開始です。

実際にレーンにボールを投げてみると、さっきまでできていたフォームが崩れてしまい、思うように投げられない選手たち。ボールを変えたり、講師の方に沢山質問をしたりしながら修正をしていきます。

最初はなかなか倒れてくれなかったピンも、だんだんと多く倒れるようになってきました。

練習投球が終わると、ゲーム形式で2ゲームのスコアをとりました。力のあるボールでストライク・スペアを取る選手もいて、良かった時はハイタッチで喜びあう姿も印象的でした。個人競技のイメージが強いボウリングですが、国スポなど様々な大会で団体戦があるので、こうしてチームを盛り上げる雰囲気は大切です。

今まで経験したことのあるボウリングとは違い、競技スポーツとしてのボウリングの体験は新鮮だったのではないのでしょうか。奥の深いボウリングに興味を持って、スポーツとして競技として続けていく選手が出るかと嬉しいです。

午後からはバレーボールを実施しました。

バレーボールは、広島サンダースOBの方々のご協力のもと、広島市南区にある猫田記念体育館で開催しました。

最初はストレッチやボールを使った鬼ごっこを行いました。怪我をしないためにも入念な準備が大切です。チームに分かれて、ボールを転がすゲームなど、ボールを使いながら身体を温めていきます。次にアンダーハンドパス、オーバーハンドパスの練習をしていきます。



講師の方から気を付けることを教わり、実際にやってみます。膝のクッションをうまく使って試行錯誤しながら、最初うまくできなかった選手もできるようになっていきます。講師の方が周って丁寧に教えてくださるので、正しいフォームを身に付けることができました。

次は、一人ずつ順番にスパイクの練習です。スパイクをする前にステップの練習、手の振り方を教わりました。最初は、タイミングが合わずうまく打てない選手もいましたが、打つたびに講師の方がアドバイスをしてくださり、だんだんとタイミングをつかみ始めて上達していききました。

そして最後はお待ちかねの試合です。男女・学年で別れてチームを組んで対戦しました。試合の初めは遠慮もあってか、なかなかボールに積極的に触ることができず、ラリーが続きません。

しかし、少しずつ声を出すようになり、積極的にボールに触ったり、時には他の選手がボールを取りやすいように相手の名前を呼んだりすることで、ラリーが続き、スパイクで点を取れるまでに上達しました。点が入るとチームで「ヤッター」と声を上げる選手やハイタッチをするなど盛り上がりがありました。

試合をしていないチームも、みんなで試合を見ながら、自分たちの試合に向けて意見を出し合いながら、作戦を立てており、試合以外の面でもチームスポーツを体験できたのではないのでしょうか。

今回の保護者を対象に行ったサポートプログラムは、スポーツ医・

科学委員会委員で広島文教大学准教授の中敷宏美先生による「小学生期におけるスポーツと食事について」の講話でした。スポーツのための正しい食生活を身につけることの重要性等についてお話しくださいました。また、現在の食物摂取状況などのアンケート調査を行い、その分析による解析や指導助言・相談を12月のプログラムで個別に実施します。スポーツ栄養の考え方による正しい食生活を身につけるためには各家庭の役割が非常に大きいところです。ジュニア選手の育成のために、サポートをよろしくお願い致します。

今回も広島県小学生体育連盟の先生方、T&TWAMサポート株式会社のトレーナーの方など、多くの方々にご支援・ご協力いただきました。ありがとうございました。

未来を、
こうしよう!

私たちは、描いているビジョンがあります。
緑あふれる環境の中で、誰もが笑顔で働き、学び、生活できる未来。
私たち中電工が、持続可能な社会づくりに貢献していきます。
これからの時代のニーズに合わせて進化し続けながら、
みなさまとともに歩んでいきます。

- 屋内電気工事
- 情報通信工事
- 送変電地中線工事
- エネルギー関連工事
- 空調管工事
- 配電線工事
- リニューアル工事
- 環境関連工事

86th 中電工

CHUDENKO

〒730-0855 広島市中区小網町6番12号
www.chudenko.co.jp

「スーパージュニア選手育成プログラム2024」第5回体験プログラム

12月14日(土)の第5回体験プログラムは、スピードスケートを実施しました。

広島市東区のひろしんビッグウェーブで、広島県スケート連盟のご協力のもとに、スピードスケート(ショートトラック)の体験プログラムを開催しました。



スケートリンクに入る前に、スケート競技(スピード、フィギュア、アイスホッケー)の説明を聞いた後、スケート靴、肘・膝のサポーター、ヘルメットを借りて、リンクサイドに集合です。初めてスケートを体験するスーパージュニア選手も多くおり、普段履いたことのない靴を履くことに苦戦する姿も見られましたが、指導者の方にも手伝っていただき、ようやくリンクに上がる準備が整います。まず最初に、広島県スケート連盟のジュニア選手にフィギュアスケート・スピードスケートの模範滑走をしていただきました。スーパージュニア選手たちは、年齢があまり変わらないジュニア選手たちが軽やかに滑る姿を間近で見て、圧倒されている様子でした。

いよいよ、スーパージュニア選手たちもリンクへ入ります。まず初めは水上での歩行練習で、壁から手を離してゆっくり歩きながら氷に慣れていきます。最初は壁を離すことができないスーパージュニア選手もいましたが、壁に歩いて歩く練習を重ねるうちにどの選手も壁から手を離して、少しずつ滑れるようになっていきました。

次に3グループに分かれて滑走の練習です。ゆっくり両足で前に進めるようになったら、ひょうたん滑走や片足での滑走、止まり方などを教えてもらったあとに、後ろ向きでの滑走にもチャレンジしました。カラーコーンを置いて小さな周回コースを滑走する練習では、最初に比べて転ぶ回数がぐんと減り、上達を感じることができました。上達してきた選手の中には、クロッシングをする様子も見受けられました。



最後は、男女別に、一周のレースです。各組1着が次の決勝に進みます。スタートしたら、下ではなく前を向いて滑れ、とアドバイス。ゴールが近くなると気持ちが焦って「滑る」より「走る」になることや、ゴール直前で転倒する選手がいるのは、毎年恒例の風景です。レーススタートの合図で一気に選手たちが滑りはじめる姿は、体験が始まったばかりの時、恐る恐る氷に立っていた姿とは別人のようでした。参加した選手全員が、コース1周を滑り切ることができるほどに上達していました。次に、予選で勝ち上がった各組1位の選手たちが男女別に分かれて決勝レースを行いました。各組1位通過の選手だけでなく、予選からより一層白熱した決勝レースが繰り広げられ、決勝に残らなかった選手たちから「がんばれ!」「行け!」という応援の声が自然と上がりました。決勝に残った選手には広島県スケート連盟から各順位の表彰状が授与されました。この体験がきっかけで、ご家族や友達とスケート場に行く回数が増えることを期待しています。



今回は、男女別に、一周のレースです。各組1着が次の決勝に進みます。スタートしたら、下ではなく前を向いて滑れ、とアドバイス。ゴールが近くなると気持ちが焦って「滑る」より「走る」になることや、ゴール直前で転倒する選手がいるのは、毎年恒例の風景です。レーススタートの合図で一気に選手たちが滑りはじめる姿は、体験が始まったばかりの時、恐る恐る氷に立っていた姿とは別人のようでした。参加した選手全員が、コース1周を滑り切ることができるほどに上達していました。次に、予選で勝ち上がった各組1位の選手たちが男女別に分かれて決勝レースを行いました。各組1位通過の選手だけでなく、予選からより一層白熱した決勝レースが繰り広げられ、決勝に残らなかった選手たちから「がんばれ!」「行け!」という応援の声が自然と上がりました。決勝に残った選手には広島県スケート連盟から各順位の表彰状が授与されました。この体験がきっかけで、ご家族や友達とスケート場に行く回数が増えることを期待しています。



今回も広島県小学生体育連盟の先生方、T&TWAMサポート株式会社のトレーナーの方など、多くの方々にご支援・ご協力いただきました。ありがとうございました。

「スーパージュニア選手育成プログラム2024」第6回体験プログラム

12月21日(土)の第6回体験プログラムは、マエダハウジング東区スポーツセンターで、広島県テニス協会のご協力のもと、テニスの体験プログラムを開催しました。

硬式のボールを使ったテニスではなく、レッドボールと小さいラケットを使った子どもや初心者向けのTENNIS PLAY & STAYという形で体験プログラムを実施しました。

まずは、入念な準備運動をした後に、キャッチボールでボールの動きに慣れていきます。2人ペアになり、キャッチボールを行います。一言にキャッチボールと言っても、1個のボールを投げ合うキャッチボールだけでなく、2個のボールをバラバラに投げ合ったり、同時に投げ合ったり複雑なキャッチボールを行います。2個同時のキャッチボールが始まると、どちらか一方のボールが取れずに、ボールが転がっていく光景が見られましたが、だんだんとコツを掴んで転がっていくボールの数も減っていました。



次に、ラケットを持ってボールを扱う練習に入ります。まずは、一人で垂直にボールを上げて表と裏の面を使う練習をした後、ペアで腕を掴みあい、ラケットでボールを上げる練習をします。ペアで腕を掴んでいるので、相手のラケットが届く場所にボールを上げなければ、相手を振り回してしまいます。ペアで練習を繰り返しながら、ラケットでボールをコントロールする感覚を磨いていきます。そのあと壁を使って打つ練習をしました。



次に、グループに分かれて、ラリーに挑戦です。今回、コートはバドミントンコートを利用しましたので、通常のコートより小さいため、打つ力が強すぎても弱すぎてもラリーは続きません。ネットに引っかかってしまうとラリーを続けることはできないので、まずはネットを越すことを目標に打つようにという指導者からのアドバイスを受け、初めはラリーを続けることに苦戦していた選手たちも、相手の取りやすいところに打ってあげることを意識して、スムーズにラリーが続くようになったペアが多かったです。



ボールの扱いに慣れたら、試合形式での練習です。まずはシングルの練習です。たくさん練習したラリーの成果をそれぞれ発揮していきます。続いてダブルスの練習をして、いよいよ試合開始です。まずは最初に練習したシングルの試合からです。試合になると、勝ちたいという気持ちが出て、選手たちも練習の時より一層力が入ります。勝ちたいという気持ちがある中でも、最初の一打は先ほど教わった相手の取りやすいところに打つことを意識している選手の姿に練習の成果を感じ取れました。だんだんと慣れてくると、コースを狙って打つこともできるようになり、楽しさも増えていきます。

ここで、8つあるコートの端から試合を行い、勝つごとに隣のコートに移動する勝ち残り戦を行うという指導者の方からの提案に、選手たちのボルテージはどんどん上がっていききました。ダブルスでも同じように勝ち残り戦を行い、シングルとは違ったペアでお互いを助け合う姿も見え、同じテニス競技でもシングルとダブルスとで違う戦い方を体験できたのではないのでしょうか。今回の体験は室内でしたが、硬式ボールを打ってみたい、広いコートでやってみたい、と思う選手もいたのではないのでしょうか。今回の体験をきっかけに、新しいスポーツに挑戦してくれたら嬉しいです。

今回の保護者を対象としたサポートプログラムは、前回実施した食事調査の回答を踏まえた個別懇談でした。担当する6名の先生から、各選手の回答を踏まえた具体的なアドバイスが行われました。ジュニア選手育成の家庭でのサポートの参考となることを期待します。

今回も広島県小学生体育連盟の先生方、T&TWAMサポート株式会社のトレーナーの方など、多くの方々にご支援・ご協力いただきました。ありがとうございました。



「スーパージュニア選手育成プログラム2024」ファイナルトライアル

令和7年1月19日(日)に、広島県立総合体育館小アリーナにおいて今年度最後のプログラムとして、体のバランストレーニングと運動適性テストを行いました。まず午前は、第1回体験プログラムでも実施した「体のバランストレーニング」で、講師は第1回と同じく、一般財団法人日本コアコンディショニング協会の竹原亮



紀マスタートレーナーです。

体の軸・重心を安定させるトレーニングや、効率的な身体の動かし方などを教えてもらいながら実践しました。特にスポーツをする上で大切なコア(腹筋・背筋など)を鍛えるトレーニングは、一見激しい動きには見えませんが、全身を使った運動なので選手たちからは「きつい」と悲鳴があがります。



第1回に行ったトレーニングもあり、選手たちは前回のプログラムの自分の身体との変化を実感することができたのではないのでしょうか。

今回も、平均台や跳び箱、マットを使ったトレーニングも行いました。

そして、最後は男女別学年別にカラーマーカーを制限時間内により多く集める競争をしました。競い合う中でも楽しみながら体の切り返し方や効率的な動き方を学ぶことができました。



自分の身体を思うように操る技術(コアの使い方)は、どのスポーツをするにも重要になるので、教わったことを継続して実施してくれると嬉しいです。

今回の保護者を対象に行った最後のサポートプログラムは、スポーツ医・科学委員会副委員長の村上恒二先生による「ジュニア期スポーツ障害と予防」の講話でした。

先生のこれまでの医療活動のご経験を踏まえ、子どもの骨や関節等の特徴からジュニア期に起こりやすい障害の具体的な症例や使い過ぎ症候群についてお話しいただきました。また、スポーツ障害の予防や対策についても学び、参加した保護者も熱心に聞いていました。



午後は、この育成プログラムの締めくくりとして、5月に行ったトライアルと同じ内容の運動適性テストを行いました。

上体起こし、立ち幅跳び、長座体前屈、40m走、ソフトボール投げ、20mシャトルランの6種目を実施し、自分の記録を確認しました。

今回の測定結果は、5月のトライアル時と比較できる形で各選手に返却されますので、届いたら自分の記録を確認して成長を感じてみてください。最後に、全員に修了証とすべてのプログラムに参加した選手に皆勤賞が交付され、スーパージュニア選手育成プログラム2024は完結しました。



今年度は計6回のプログラムを通して9競技を体験することができました。いろいろな技術を習得しやすい「ゴールデンエイジ」と呼ばれる小学校高学年の時期に、多くのスポーツと仲間に出会うことができたのは、選手の皆さんにとって貴重な経験になったと思います。これからも様々な体育・スポーツのイベントに積極的に参加して、自分の特性を磨いていかれることを期待します。

また、保護者の皆様には、毎回の引率、サポートプログラムへの出席など、ご協力ありがとうございました。スポーツ選手の育成には、家庭でのサポートが欠かせません。このプログラムで得られたことを活かしていただき、子どもたちの成長をしっかりと見守っていただきたいと思います。

最後になりましたが、今年度も広島県小学生体育連盟の先生方、T&TWAMサポート株式会社のトレーナーの方など、多くの方にご支援・ご協力いただきましたことに深く感謝申し上げます。





さあ、ともに 未来へ!





ラグビー部
陸上競技部
女子卓球部

中国電力はシンボルスポーツ部の活動を通して、地域のスポーツ発展に貢献するだけでなく、夢に向かって挑戦し続けることの大切さを子どもたちに知ってほしいと願っています。

中国電力株式会社

<https://www.energia.co.jp/>

スポーツ指導者研修会

令和6年度スポーツ指導者研修会を1月11日(土)・2月11日(火祝)の2回開催し、計496名のJSPO公認スポーツ指導者等に受講いただきました。

1月の研修会では、広島市立広島特別支援学校の教諭で、(一財)日本ペップトーク普及協会認定講演講師の福富茂樹氏に、「PEP TALK～言葉の力で心を最適化!」と題して次のようなお話をいただきました。

脳は肯定と否定を区別できないため、たとえ「緊張しないで」と否定形を伴っても、ネガティブな言葉は、ネガティブなイメージのまま脳へインプットされ体の反応にも影響します。スポーツの場面では、指導者が選手へかける言葉で、いかに良いイメージをインプットさせるかが重要になります。

例えば、試合でどうプレーしたいか、どんな心境になりたいかと、イメージをより明確に持たせることができる言葉をかければ、セルフイメージが上がり、「よし、やろう」と選手のやる気スイッチを押すことにつながります。また、そうした言葉の扱い方を指導者自身にも向けて、心をコントロールし良い状態を保っていくことも、良い指導を行うための鍵になります。このように「ペップトーク」の活用で、より効果的に選手のパフォーマンス向上につながるような指導ができると考えられます。



また、2月の研修会では、(株)広島ドラゴンフライズ代表取締役社長の浦伸嘉氏をお招きし、「広島

のスポーツを盛りあげる」とのテーマで、競技のレベルアップのためには、そのことをビジネスと捉えて十分な投資を行いながら、周辺環境のレベルアップを行うことが重要であること、より具体的には、昨年のBリーグ優勝という輝かしい実績につなげることで、スポーツやビジネスで成功していくために、クラブチームで実践しているいくつかのポイントについてお話をいただきました。

枠組みの大小を問わずナンバーワンに徹底的にこだわる「ナンバーワン戦略」や、観る人の五感に訴えるような演出を可能とする「スポーツの価値と最新テクノロジーとの融合」、「スピード・確率の向上の追求」を企業理念や戦略の源となる組織力・チーム文化と捉え、一般の多くの人の心理を読み取りながらその精度を高めていること、そして、困難な目標を達成する際に重要となる五つの要素として「明確な共通の目標の共有」、「組織への誇り・忠誠心の確立」、「正しい情報を集めるためのコミュニケーション」、「結果を導くリーダーの存在」、「効率的・合理的なルールの設定」を挙げられていました。

また、これまで述べたような形で組織力を高めていくことが、一人一人の個人のパフォーマンス向上にもつながっているとのことで、指導者の方にとっても、各チームの運営手法や選手への指導法を考える上で示唆に富んだお話だったのではないのでしょうか。

トップアスリート育成事業2024

広島県が国スポ総合8位入賞を達成するため、ジュニア選手を対象に、国スポ候補選手としての自覚を養うとともに、スポーツ医・科学等の各種研修を通して競技力の向上を図ることを目指し、トップアスリート育成事業2024を開催しました。2月8日(土)・9日(日)の1泊2日の日程でグランドプリンスホテル広島を会場に、各競技団体から推薦された11競技52名のジュニア(中・高校生)選手が参加しました。

特別講演には、広島県立佐伯高等学校出身で、高校在籍中に出場されたアーチェリー全日本選手権では、最年少優勝を果たし、東京2020オリンピックアーチェリー男子団体銅メダリストの河田悠希氏(株式会社エディオン)にお越しいただき、目標設定の大切さについてお話しいただきました。



「夢と目標」の違いについて、最終目標を達成するためにも、短期目標・中期目標・長期目標を設定し、短期・中期は時に修正しながら、長期目標を達成していくプロセスを紹介いただきました。河田選手から直接目標を聞かれたジュニア選手もおり、他のジュニア選手を前に堂々と目標を発表している姿が印象的でした。

河田選手がオリンピックに出場された時のお話もしてくださり、オリンピックの実体験を聞ける貴重な機会にジュニア選手たちもたくさんメモを取りながら、一生懸命聞いていました。

質疑応答の時間では、河田選手の食生活などについてジュニア選手から質問があり、アスリートとしての過ごし方を少しでも吸収しようとするジュニア選手たちの姿が見られました。

最後に、日頃から感謝の気持ちを忘れずに、沢山の方から応援される選手を目指してほしいと河田選手から激励の言葉をいただきました。

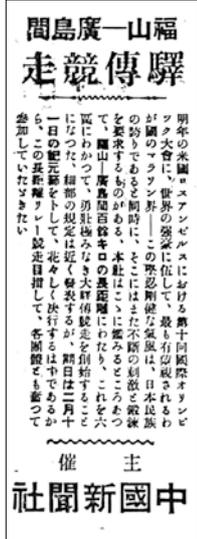
伝統か刷新か、「苦渋の選択」迫られた男子駅伝移行

新春の安芸路を彩る全国都道府県対抗男子駅伝(ひろしま男子駅伝)は1月19日、節目の30回大会だった。長野が圧倒的な強さで4連覇を果たし、開催地広島も4位と面目を施した。男子駅伝は地元で長く親しまれた福山-広島間の中国駅伝廃止という厳しい条件を乗り越えて生まれた経緯がある。

1994年1月、東京・赤坂の中国料理店で日本陸連と陸上記者会の懇親会が開かれた。筆者は当時、中国新聞東京支社のスポーツ記者。宴たけなわのこる別室に呼ばれ、専務理事の帖佐(ちょうさ)寛章から「中国駅伝を廃止して男子駅伝を始めたい。広島の本社事業局へ伝えてくれ」と切り出された。翌日、本社へ一報を入れた。事業部長も筆者も「寝耳に水」。広島陸協の一部幹部だけが事情を承知していた。事態は一気に動き始めた。



第30回ひろしま男子駅伝で4連覇した長野チーム(筆者撮影)



藤井記者が発案した駅伝開催の社告(1931年1月11日付中国新聞)

中国駅伝は1931年2月11日に最初のレースを行った。発案者は中国新聞運動部の藤井猪勢治(いせじ)記者である。翌年の創刊40周年記念事業のアイデアだった。社告が1月11日に載った。文案はもちろん、福山-広島間の距離計測、区間設定、チーム募集、役員・審判の手配から連日の記事執筆まで藤井がこなした。

新春の風物詩となった中国駅伝は順調に回を重ねた。戦前、戦後の3回中止したものの1948年に復活すると熱気は増した。実業団の強豪や大学などの「一般」、街のランナーで構成する「郡市」と「高校」の3部門が同じコースで競った。いつしか「東の箱根、西の中国」や「日本三大駅伝(全日本実業団、朝日、中国)」と称されるまでに発展し、知名度も高かった。

陸連が伝統レース廃止にこだわったのは「ロードレース新設には旧来大会の廃止(スクラップ、アンドビルド)が条件」とする警察庁の意向があったからだ。94年1月以降、主催者の広島陸協と中国新聞社は広島県警や関係機関との調整を急いだ。とはいえ、伝統駅伝の廃止には好意的な受け止めばかりではなく、陸協、新聞社ともつらい選択を迫られた。

コース設定も難航した。ゴールは中国駅伝と同じ広島平和記念公園とした。問題は国道2号の折り返し点。陸協は宮島口の西方(廿日市市大野)を主張したが、県警は渋滞発生を理由に拒否。結局は藤田雄山知事の協力が実った。難問は長年出場しているチームからの突き上げだった。実業団や学生たちは過密日程の中での都道府県対抗案に難色を示した。最も強硬だったのは郡市の部の関係者たちだった。「このレースは生きがい」「走る場を奪うな」「(新聞の)不買運動も辞さない」という非難が届いていた。

最後のレースとなった95年の第62回大会前日の監督会議。府中市上下町出身の陸連強化本部長、小掛照二は「私も高校時代、この駅伝で声援を送った。気持ちはよく分かる。だが、日本の男子長距離発展のために協力してほしい」と頭を下げた。荒れた場内の雰囲気はやっと静まった。

陸連が新駅伝開催にこだわったのは、男子ランナーの人材難だった。マラソンの五輪メダルは1992年バルセロナ五輪で森下広一(旭化成)の得た銀が最後。世界で通用する新たな逸材が期待された。先行した京都の女子駅伝は10回を超え、ヒロインが続出、陸連の財源も潤っていた。男子駅伝創設にこだわる理由もそこにあった。地元にとっては文字通り「苦渋の決断」ではあったが。

コロナ禍を超え、男子駅伝は力強く歩みを進めている。長距離のトップ選手で広島のレースを経験しない走者は見当たらない。待ち望まれるのは世界的ランナーの出現か。そうでなければ94年前、気宇壮大な駅伝を考案し、原爆の犠牲となった藤井記者も浮かばれまい。

(敬称略)

広島県スポーツ協会広報委員長 渡辺勇一(広島経済大学名誉教授)

未来を、ひろげる。

HIROGIN HOLDINGS

広島銀行 | ひろぎん証券 | しなみ債権回収 | ひろぎんヒューマンリソース | ひろぎんキャピタルパートナーズ | ひろぎんリース
ひろぎんエリアデザイン | ひろぎんクレジットサービス | ひろぎんITソリューションズ | ひろぎんライフパートナーズ

(2024年7月3日現在) 2407